



主張

何となく、今年はいい事あるごとし…

更なる『進歩』の一年に

西村文一

「何となく、今年はいい事あるごとし、元日の朝、晴れて風無し」 石川啄木

この歌は新春のおだやかな空によく似合い、今年一年の希望と期待を込めて送る年賀状にも、私はこの歌を添えることがよくあります。

年始に年賀状を交換し合うという文化は、年々少しずつですが減ってきているように感じます。それは人口の減少、他人との付き合い方の変化、慣習に対する姿勢の移り変わり、核家族化などいろいろな理由が考えられますが、やはりインターネットとソーシャルメディアの普及によるところが大きいと思われます。

教師の役割は、生徒やその保護者との信頼関係づくりが基本です。他の職業以上に高度なコミュニケーション能力が求められますが、情報や思いを伝達する手段が近年大きく変化しつつあります。「信頼を得るには足を運ぶ。」「電話で済ませず、とにかく行って顔を合わせて話すことが大切。」私も若い頃に先輩の先生方から、このように教わりました。宮澤賢治の代表作のひとつである詩「雨ニモマケズ」の中の、「南ニ死ニサウナアレバ、行ッテ、コハガラナクテモイ、トイヒ」という一節の中で、「行ッテ」、このことが大切であると強調されたことを鮮明に覚えています。今でも、このことを心に留め、「メモを置



しておく」「電子メールを送る」「電話で話す」「足を運び出会うて話す」「文書にまとめて報告する」など伝える方法は様々ですが、内容や相手、状況によって、最も適切な方法は何かを判断することが肝要であると、本校の教職員にも伝えているところです。

昨秋の十月十九日に、中学校教育七〇年・第六八回全日本中学校長会東京大会に御台臨を仰いだ皇太子殿下は、記念式典でのおことばにおいて、「中学校教育について『社会で自立して生きていく基礎を培う大切な時期に行われるもの』と述べられました。また、その中学校教育を支える『教師の資格は、自分自身が『進歩』していることである。』と、ノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智先生は記念講演の中で、お母様・文子様の日記を引用し指摘されました。

正月の注連飾りにも使われる「ゆずり葉」は、常緑樹で新しい葉が育った後で古い葉が落ちるといふ特徴があります。古い葉が役目を終えてから新しい葉に後を「ゆずる」ことから、「ゆずり葉」といふ名前がついているそうです。かつて小学校六年生の国語の教科書に、詩人・河合醉茗がつくった「ゆずり葉」といふ詩が載っていました。世代を超えて伝え継ぐあらゆる営みを「ゆずり葉」の特徴に例え、家庭での親の子育てによって、生きることの尊さや素晴らしさを子供たちに伝えるという、人間の生命の永遠性を詠んだ詩です。学校でも教師の世界でも、家庭と同様に、先輩から受け継いだものをより豊かに高め、それを後輩に教え、よき伝統として「ゆずっていく」ことが繰り返されなければなりません。中学校教育七一年目、平成三十年の新しい年を迎え、中学校教育の更なる「進歩」の一年になることを強く願うところです。

（全日中副会長・滋賀県甲賀市立水口中学校長）